

一流指導者におけるキャリア形成過程の仮説モデルの有効性についての実証研究

—新スポーツ的社会化理論の構築に向けて—

山田 亜沙妃*

工藤 康宏** 野川 春夫**

抄録

近年、トップスポーツの推進に寄与する存在としてスポーツ指導者の重要性が増しており、指導者の養成やトップアスリートから指導者へのデュアルキャリアに関する環境整備は国レベルで進められている。世界で活躍できる国際的指導者を育成することは日本の国際競技力向上にとって重要な課題であり、日本人指導者のキャリア発展を促すことが期待されている。本研究では、2016年度笹川スポーツ研究助成採択研究で試案した「一流指導者のキャリア形成過程の仮説モデル」(山田ら, 2017)の有効性を検証することを目的とした。具体的には、一流指導者のキャリア形成過程を規定する要因とその影響を明らかにし、本仮説モデルを検証することであった。東京2020年夏季オリンピック競技(12競技)の一流指導者(2017年度日本代表の監督、ヘッドコーチ、コーチ)50名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙では、本仮説モデルを基に一流指導者としての役割を獲得するまでの過程とスポーツ的社会化要因(重要な他者、社会化状況、個人的属性)の経験有無および重要度に関する質問を設定した。

本研究から一流指導者の発達過程については、本仮説モデルと同様に6ステージで構成されることが実証された。しかしながら、発達過程については本仮説モデルと比べ「一流競技者/新米指導者」の発達過程は長期傾向、「代表指導者」と「国際的指導者」の発達過程は早期傾向を示したことから、各発達過程の年齢区分については修正が求められる。スポーツ的社会化要因については、抽出された全32項目において経験を有することが確認されたが、項目によっては経験を有する一流指導者が全体の40%に留まっていた。しかしながら、経験した者にとっては、いずれの項目もキャリアを移行する上で影響を与える重要な要素であることが確認された。特に、競技者キャリアの移行では「両親、指導者、海外経験、専門的知識の習得」、競技者から指導者への移行では「有望・一流選手、メンターコーチ、雇用の安定、マネジメント能力」、指導者キャリアでの移行では「家族、所属先の理解、指導での成功経験と失敗経験」の重要度が高い傾向が示された。本研究から一流指導者に至る過程の中で試行錯誤を繰り返し、一流指導者としての役割を学習すると考えられる。そのため、指導者としてロールプレイできる機会を多く設けることが重要となろう。今後は、更なるデータの蓄積を行い、継続的に本仮説モデルを修正することで各世代を考慮した理論モデルの構築につながると考えられる。

キーワード：一流指導者、キャリア形成過程、スポーツ的社会化

* 国立スポーツ科学センター 〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1

** 順天堂大学 〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台1-1

Empirical Study on the effectiveness of hypothetical model of career process in Elite coach

—Toward building a new sports socialization theory—

Asahi Yamada*

Yasuhiro Kudo**

Haruo Nogawa**

Abstract

Recently, Coaches are increasingly important of as the presence contributor to the promotion of elite sport. For that reason, development of coaches and dual career from elite athletes to coaches are environmental improvement is being advanced at the national level. The international coach development and encourage Japanese coach development are a crucial issue for international sporting success in Japan. The aim of this study was to empirical study on the effectiveness in the 2016 Sasagawa Sports Research grants “Hypothetical model of career process in elite coach” (Yamada et al., 2017). The detail of the research was to verify the hypothesis model by clarifying the factors for career formation process of elite coach and their influences. Data was collected from 50 Japanese elite coaches (Japanese national team’s head coach and coach) of the 2020 summer Olympic Games (12 sports) via a questionnaire survey. On the questionnaire, include with a process of acquiring the role as a getting elite coach based on the hypothesis model and the experience and that importance (six-point Likert scale) of three socialization factors (significant others, socialization situations and personal attributes).

The results of this study, it was demonstrated that the coach development consisted of six stages as well as the hypothesis model. However, with regard to the coach development stage of the “elite athlete” is longer tendency and “national coach” and “international coach” is early tendency than hypothesis model, correction is required for age category. About the sports socialization factors, experience was confirmed in all extracted 32 items, but depending on the item, it remained at about 40% of the total. However, any items were a critical factor influencing the transition of career process for those who are experienced. In particular, the critical item in the transitional period of the athletic career was “parents, coach, knowledge of coaching and experience in overseas”. In the transitional period of athlete to coach was “talent/elite athlete, mentor coach, status of coach and management skills”. In the transitional period of coaching career was “family, understanding of club and experience of success and failure in coaching”. The elite coach has experience of try and error in development process and learn to the role as an elite coach. Therefore, it will be important to set more opportunities for role play as a coach. In the future, it will accumulating further data and continuing model review the hypothesis model leads to the construction of a theoretical model considering each generation.

Key Words : Elite coach, Career process, Sport socialization

* Japan institute of sports sciences 3-15-1 Nishigaoka, Kita-ku, Tokyo 115-0056, Japan

** Juntendo University 1-1 Hiraga-gakuendai, Inzai-shi, Chiba 270-1695, Japan

1. はじめに

近年、トップスポーツの推進に寄与する存在としてスポーツ指導者の重要性が増しており、指導者の養成やトップアスリートから指導者へのデュアルキャリアに関する環境整備は国レベルで進められている。また、国際競技力向上施策（SPLISS）の成功要因のひとつとしても指導者の管理と養成が挙げられており、主に指導者の質の確保と雇用の拡充が重要であると考えられている（De Bosscher et al., 2007）。日本の現状は、海外から優れた指導者を招聘する方法が競技水準向上の施策として有効であると考えられている。2016年リオデジャネイロ・オリンピックにおいても出場した日本チーム33競技種目中、11競技種目で外国人指導者（監督、チームリーダー、コーチ）を雇用していた（日本オリンピック委員会, 2016）。

わが国の国際競技力向上は外国人指導者に依存する傾向が強くなっているといえるが、主要な国際大会において安定してメダルを獲得するには、統括競技団体自らが国際レベルの指導者を輩出する必要があると指摘されている（スポーツ庁, 2016）。つまり、世界で活躍できる国際的指導者を育成することは日本の国際競技力向上にとって重要な課題であり、日本人指導者の育成が期待されている。

トップレベルの指導者に関する研究は、コーチング学や心理学、社会学などさまざまな角度から研究され始めているが、キャリアに関してはスポーツ参加から国際的指導者に至るまでのキャリアステージと各キャリアステージの特徴に焦点が当てられている（Erickson et al., 2007； Schinke et al., 1995）。De Bosscher et al. (2015)によると、一流指導者の多くはトップアスリートの経験を有しており、オリンピッ

クや世界選手権などの主要な国際大会において世界トップクラスの経験があると報告している。一方、トップレベルでの競技経験を有することは必要条件ではないとの意見も多いが、トップアスリートとしての経験の有無によって指導者のキャリアステージの進展が異なるとの指摘もあり（Carter and Broom, 2009）、選手としての競技レベルがその後の指導者としてのキャリアに影響を与えることが示唆される。しかしながら、先行研究では国際的な指導者に至るまでのキャリアステージを提示するに留まり、理論的な研究は行われておらず（Lavelle, 2006）、一流指導者の特徴においても一致した見解が得られていないのが現状である。

日本人の一流指導者を育成するには、どのような要素や環境整備が必要となるのかを明らかにすることが国際競技力向上にとって重要となるが、日本人の一流指導者がどのような過程や経験を経て、その役割を獲得するのかは明らかになっていない。そこで、山田ら（2017）は、日本人の一流指導者のキャリア形成過程に着目し、ライフステージを踏まえた一流指導者のキャリア過程と社会化要因を明らかにし、キャリア形成過程に関する仮説モデルを試案した（図1参照）。

2. 目的

本研究では、2016年度笹川スポーツ研究助成採択研究で試案した「一流指導者のキャリア形成過程の仮説モデル」（山田ら, 2017）の有効性を検証することを目的とする。具体的には、一流指導者のキャリア形成過程を規定する要因とその影響を明らかにし、仮説モデルを検証する。

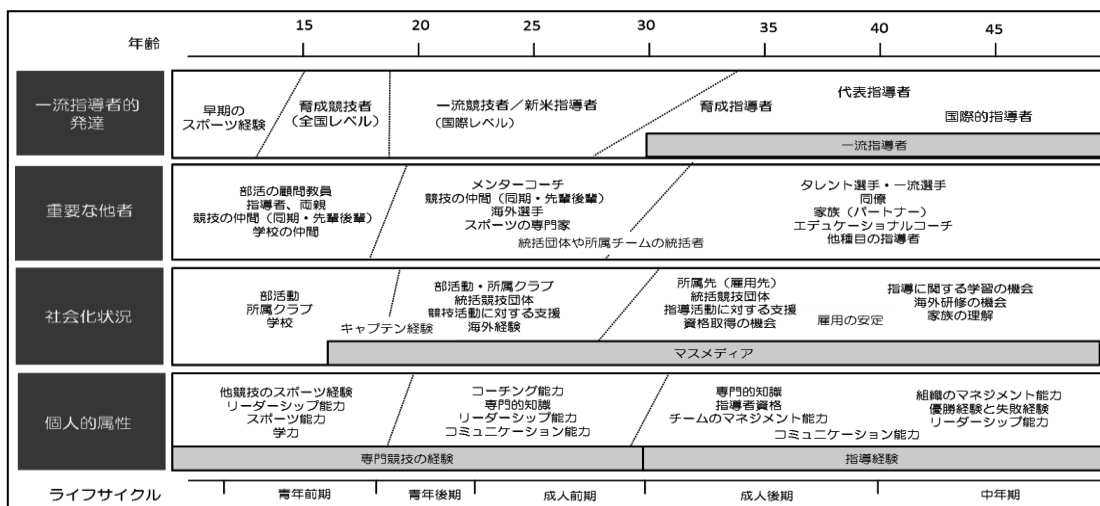


図1. 一流指導者におけるキャリア形成過程の仮説モデル（山田ら, 2017）

3. 方法

3. 1. 研究の前提：仮説モデル（山田ら，2017）

近年、スポーツでのキャリア研究では発達プロセスを用いた研究が主流となっているが、Lemyre et al. (2007) は、指導者の多くは選手経験やアシスタントコーチの経験を介して専門的知識を獲得し、スポーツを通して社会化されると報告している。そこで、本仮説モデルでは12競技20名の一流指導者を対象に半構造化面接調査を実施し、発達プロセスと社会化プロセスを踏まえたキャリア形成過程の仮説モデルを試案した。一流指導者の発達については、6ステージで構成されることが確認された（表1参照）。スポーツの社会化要因については、スポーツの社会化理論（Kenyon and McPherson, 1973；山口，1987）を参考に、抽出された各項目を3因子に分類した（表2参照）。本仮説モデルでは、重要な他者（15項目）、社会化状況（15項目）、個人的属性（12項目）で構成されることが確認された。

表1. 一流指導者の発達と詳細

一流指導者の発達（キャリアステージ）	年齢	詳細
1 早期のスポーツ参加	～15歳	・専門スポーツの開始 ・他競技種目の経験
2 競技者期 育成競技者	12～17歳	・全国レベルまたは代表レベルの競技経験
3 一流競技者/新米指導者	17～34歳	・代表レベルの競技経験 ・後輩やチームメイトへの指導を経験
4 育成指導者	26～35歳	・ジュニアやU23選手を指導 ・アシスタントコーチ
5 指導者期 代表指導者	32歳～	・代表レベルの選手を指導 ・専任コーチ
6 国際的指導者	38歳～	・代表チームでヘッドコーチや強化部長 ・Aチーム、Aリーグで監督

表2. スポーツ社会化要因の分類

因子	詳細
重要な他者	指導者キャリアにおいて影響を与えた人々（両親、友人、まよひ、指導者、体育の教師など）
社会化状況	社会的学習が行われる機会や環境、制度や生活場面
個人的属性	個人の身体的、心理的特性（パーソナリティ的特性）

3. 2. 研究方法（質問紙調査）

3. 2. 1. 調査方法

本調査では、直接法（配布・回収）を用いた質問紙調査を実施した。所要時間は、25分程度であった。期間は、試合シーズンを考慮し、オフシーズン期である2017年12月21日から2018年2月10日で実施した。なお、研究代表者の所属機関において、倫理委員会への研究計画の申請を行い、承認を得て実施した。

3. 2. 2. 調査対象者

本調査では、東京2020オリンピックの夏季競技種目の各強化担当者に調査依頼を行い、調査への同意を得られた12競技の一流指導者（2017年度日本代表シニアチームにおける監督、ヘッドコーチ、コーチ）50名を対象に実施した。

表3. 調査対象者

	代表ヘッドコーチ （監督含む）	代表コーチ	計	代表ヘッドコーチ （監督含む）	代表コーチ	計	
1 レスリング	5	9	14	7 近代五種	1	1	2
2 柔道	2	10	12	8 空手道	1	1	2
3 体操競技	-	8	8	9 シンクロ	-	1	1
4 フェンシング	-	3	3	10 ボクシング	-	1	1
5 トランポリン	1	2	3	11 ラグビー	-	1	1
6 カヌー	-	2	2	12 卓球	-	1	1

3. 2. 3. 調査項目

1) 一流指導者の発達（キャリア形成過程）

一流指導者の発達については、スポーツ参加から一流指導者に至るまでどのようなステージを経て、現在の役割を獲得したのかを明らかにするため、Erickson et al. (2007) および Schinke et al. (1995) のガイドラインを使用し、スポーツ参加期から現在（一流指導者）に至るまでの競技レベルやコーチ経歴に関する質問を設定した。

2) スポーツの社会化要因

Wylleman et al. (1999) によると、キャリアを捉える上では移行期における経験を明らかにすることが有効的であると報告している。そこで、本調査では移行期における経験有無を尋ねることでスポーツの社会化要因の影響を明らかにすることとした。具体的には、移行期を「移行期①：競技者、移行期②：指導者への移行、移行期③：指導者」の3つの移行期に分類し、各移行期におけるスポーツの社会化要因の経験有無を尋ねることとした。

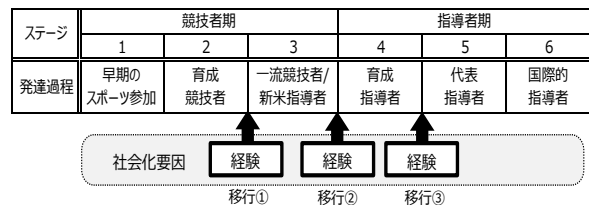


図2. スポーツの社会化要因の設問（イメージ）

質問項目の詳細については、本仮説モデルの3因子（個人的属性、社会化状況、重要な他者）を基に有識者と議論を行い、32項目を抽出した。抽出された32項目は、各移行期に該当するものもあれば、該当しない項目も存在するため、各移行期に該当する項目に対する経験有無を尋ねた。その後、経験有の項目に関し

では移行する上での重要度を尋ねた。重要度について「1. 全く重要ではなかった」から「6. 非常に重要であった」までのリッカートタイプの6段階尺度で測定した。なお、本調査を行う前に、一流指導者経験者(n=3)を対象にパイロット調査を実施した。調査では、調査項目や調査時間等の確認を行った。

3) 分析方法

本研究では、本仮説モデルで試案した「一流指導者に至るまでの発達過程」と「その影響要因」が実証研究でどの程度当てはまるのかを明らかにするため、記述統計およびクロス集計を実施した。統計には、統計パッケージ IBM SPSS version 22 を用いた。分析したデータについては便宜上、一流指導者の発達仮説モデルを横方向、スポーツ的社会的要因は各移行を縦方向に見ながら結果及び考察を述べる。

4. 結果及び考察

4. 1. サンプルの基本的属性

役職は、監督・ヘッドコーチが 20.0% (n=10)、コーチが 80.0% (n=40) であった。性別は男性が 86.0% (n=43)、女性が 14.0% (n=7) であった。年齢は、平均 39.18 歳 (±6.9 歳) であり、指導年数は、平均 10.6 歳 (±8.4 歳) であった。なお、最終学歴については、大学 60.0% (n=30)、大学院 28.0% (n=14) であり、比較的高学歴といえる。

4. 2. 一流指導者の発達 (キャリア形成過程)

4. 2. 1. 競技者キャリア

指導している専門競技での選手経験有りは全体の 100% であり、専門競技での選手経験を有することは必須の条件であることが示唆される。競技開始年齢は、平均 9.8 歳 (±5.3 歳) であり、競技年数は平均 19.9 年 (±5.8 歳) であった。全体の 84.0% (n=84) がシニア日本代表経験を有しており、代表経験年数は平均 9.0 年 (±4.07) とし、初めて代表入りした年齢は平均 20.5 歳 (±2.6) であった (表 4 参照)。年代別日本代表の経験については、経験有りが 72.0% (n=36) であった。この結果は、先行研究 (De Bosscher et al., 2015) と同様の傾向を示し、日本人の一流指導者もトップアスリートの経験を有していることがわかった。

各ライフステージにおける競技レベルについては、青年前期の場合は全国大会レベルが 66.0% (n=33) と最も多く、続いて主要な国際大会レベルが 24.0% (n=12) であった。青年後期については、主要な国際大会が 68.0% (n=34) で最も多い結果となった。成人前期では、オリンピックレベルが 50.0% (n=23) と最

も多く、続いて主要な国際大会レベルが 39.1% (n=18) であった (表 5 参照)。役職別 (監督・ヘッドコーチ、コーチ) に競技レベルを比較すると、監督・ヘッドコーチの場合は、全体の 70.0% がオリンピックレベル、残りの 30.0% が主要な国際大会レベルの競技経験を有していた。本結果から Carter and Broom (2009) が指摘するように、競技レベルが一流指導者の発達過程に影響することが示唆される。本結果から競技者期の発達過程である「早期のスポーツ参加」と「育成競技者」は仮説モデルに当てはまることが確認されたが「一流競技者/新米指導者」に関しては、仮説モデルよりも長期傾向になることがわかった。

表 4. 競技者キャリア

	Mean	SD	Range	
競技開始年齢 (歳)	9.8	5.3	3	22
引退年齢 (歳)	28.7	3.6	18	36
競技者年数 (年)	19.9	5.8	7	32
日本代表経験年数 (年)	9.0	4.1	2	19
日本代表開始年齢 (歳)	20.5	2.6	15	27
日本代表終了年齢 (歳)	28.3	3.3	20	35

表 5. 各ライフステージにおける競技レベル

	青年前期① (12~15歳頃)	青年前期② (15~17歳)	青年後期 (18~22歳頃)	成人前期 (23歳頃~)
オリンピック	0.0% (0)	0.0% (0)	6.1% (3)	50.0% (23)
主要な国際大会	7.9% (3)	25.0% (12)	69.4% (34)	39.1% (18)
全国大会	57.9% (22)	68.8% (33)	24.5% (12)	10.9% (5)
都道府県大会	15.8% (6)	4.2% (2)	0.0% (0)	0.0% (0)
地区大会出場	7.9% (3)	2.1% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)
趣味として行っている	10.5% (4)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)

4. 2. 2. 指導者キャリア

指導者の開始年齢は、29.6 歳 (±4.1) であり、指導者を志した年齢は、25.9 歳 (±5.8) であった。指導者の経歴については、初期では、実業団コーチを経験する者が最も多く全体の 30.0% (n=15) を占めており、その後に日本代表コーチまたは年齢別コーチへ移行することが確認された。競技者としての競技レベルを「オリンピック、主要な国際大会、全国大会」の 3 つに分類し、指導者キャリアの発達過程を比較すると、オリンピックおよび主要な国際大会レベルの場合は、実業団コーチを経験したのち、日本代表コーチを経験することがわかった。一方、全国大会レベルの場合は地域レベルの指導者を経験したのちに、全国レベルに移行し、その後、年代別日本代表、日本代表と指導者としての役割を獲得してきたことがわかった。Carter and Broom (2009) が指摘するように、トップアスリートとしての経験の有無によって日本人の指導者キャリアの進展が異なることが推察される。

育成指導者を経験する年齢は、平均 29.6 歳 (±4.1) であり、日本代表コーチを経験する年齢は平均 33.11 歳 (±5.1)、日本代表ヘッドコーチの経験開始年齢の平均は 41.4 歳 (±6.4) であった。本結果から指導者期の発達過程である「育成指導者」は仮説モデルに当てはまることが確認されたが、「代表指導者」および「国際的指導者」は、仮説モデルより経験開始年齢が早期傾向を示した (表 6 参照)。Carter and Broom(2009) が指摘するように、競技者期の競技レベルが指導者キャリアの進展に影響するといえよう。

表 6. 指導者キャリア

	mean	SD	Range	
育成指導者 (歳)	29.6	4.1	18	38
代表指導者 (歳)	33.1	5.1	25	47
国際的指導者 (歳)	41.4	6.4	33	53

4. 3. スポーツ的社会化要因

4. 3. 1. 移行期①：競技者

(本格的に競技を行っていた時期)

重要な他者では、「良き指導者との出会い」、「親からのサポート」の経験有が 90.0%以上を占めており、重要度の平均値も 5.5 以上であり、非常に重要な項目であることがわかった。社会化状況では、「海外経験」が 92.0% (n=46) と最も多く、重要度も 5.37 と高い傾向が示された。個人的属性では、「キャプテン経験」が 78.0% (n=39) と最も多く、重要度では、「専門的知識の習得」が 4.95 と高い傾向が見られたが、経験有は全体の 38.0% (n=19) に留まった。

表 7. 移行期①：競技者

因子名	項目	経験有		重要度	
		%	(n)	平均値	SD
重要な他者	1. 良き指導者との出会いがあった	94	(47)	5.51	0.78
	2. NFや所属チームの関係者からの誘い	70	(35)	4.89	1.13
	3. 親からのサポートがあった	90	(45)	5.53	1.04
	4. 競技仲間からの誘い	55	(27)	4.70	1.20
	5. 部活動等の顧問との出会いがあった	82	(40)	5.37	0.92
	6. 学校仲間からの誘い	34	(17)	4.71	0.99
	7. 専門家との出会いがあった	46	(23)	4.61	0.94
	8. 海外選手との出会いがあった	74	(37)	4.62	0.95
社会化状況	1. 海外経験をした	92	(46)	5.37	0.80
	2. 統括競技団体から支援があった	64	(32)	4.91	1.23
	3. 後輩を指導していた	86	(43)	4.56	1.03
個人的属性	1. 指導者資格を取得していた	40	(20)	4.15	1.46
	2. 専門的知識を習得していた	38	(19)	4.95	0.78
	3. コミュニケーション能力を試す機会があった	62	(31)	4.61	0.99
	4. キャプテンを経験した	78	(39)	4.62	1.16
	5. 学力が高かった	24	(12)	4.50	1.00
	6. リーダーシップ能力を試す機会があった	52	(26)	4.77	1.07
	7. 運動能力が高かった	60	(30)	4.73	1.17

4. 3. 2. 競技者から指導者への移行期

重要な他者では、「メンターコーチとの出会い」の経験有が 84.0% (n=42) と最も多く、続いて「家族 (パートナー) の許容<賛成>」が 82.0% (n=41) であった。重要度は、「有望選手/一流選手との出会い」が 5.49、「メンターコーチ」が 5.38 と高い傾向を示した。社会化状況では、「後輩を指導」が 86.0% (n=43) と最も高く、続いて「所属先の理解」が 80.0% (n=40) であった。重要度は、「雇用の安定」が 5.53 と最も高いことが明らかとなったが、経験有が全体の 64.0%に留まった。このことから、育成指導者の発達過程では、雇用の安定が指導者を職業として選択する上では重要であるのに関わらず、雇用の安定していないといえよう。個人的属性では、「コーチング能力を発揮する<試す>機会」の経験有が 82.0% (n=41) と最も高く、重要度でも「マネジメント能力を発揮する<試す>機会」が 5.09 と高いことがわかった。この結果から競技者から指導者へ移行する際には、能力を試す機会の充実を図ることが重要となろう。

表 8. 移行期②：指導者への移行

因子名	項目	経験有		重要度	
		%	(n)	平均値	SD
重要な他者	1. 専門家との出会いがあった	54	(27)	5.22	0.80
	2. NFや所属チームの関係者からの誘い<勧め>	72	(36)	5.28	0.94
	3. 有望選手/一流選手との出会いがあった	70	(35)	5.49	0.66
	4. 同僚との出会いがあった	42	(21)	4.71	0.90
	5. 家族 (パートナー) の許容<賛成>があった	82	(41)	5.02	1.26
	6. メンターコーチとの出会いがあった	84	(42)	5.38	0.70
	7. 他競技の指導者との交流があった	54	(27)	4.56	1.01
社会化状況	1. 所属先の理解があった	80	(40)	5.40	0.78
	2. 統括競技団体の理解があった	66	(33)	5.15	0.94
	3. 指導活動に対する支援があった	68	(34)	5.09	1.14
	4. 指導に関する学習の機会があった	78	(39)	5.03	1.16
	5. 雇用の安定していた	64	(32)	5.53	0.76
	6. 後輩を指導していた	86	(43)	4.91	1.04
個人的属性	1. コーチング能力を発揮する<試す>機会があった	82	(41)	5.07	0.93
	2. 指導者資格を取得していた	52	(26)	4.23	1.56
	3. マネジメント能力を発揮する<試す>機会があった	46	(23)	5.09	0.95
	4. 指導に関する専門的知識を習得していた	54	(27)	4.96	0.94
	5. コミュニケーション能力を発揮する<試す>機会があった	62	(31)	4.68	1.01
	6. リーダーシップ能力を発揮する<試す>機会があった	62	(31)	4.94	1.12

4. 3. 3. 指導者期 (指導者を開始してから現在まで)

重要な他者では、「専門家との出会い」と「有望選手/一流選手との出会い」、「家族 (パートナー) の理解」の経験有がともに 90.0%以上を占めた。重要度については、「家族 (パートナー) の理解」が 5.58 と最も高い傾向が示された。Dowson and Gustin (2016) は指導者という職業は家族との時間が取れないと指摘しているが、日本人一流指導者にとっても家族の理解を得ることが、指導者としての役割遂行には重要である

ことが示唆される。社会化状況では、「指導に関する学習の機会」と「所属先の理解」の経験有が全体の90.0%以上を占めた。重要度では、「海外研修の機会」が5.41と高い傾向を示したが、経験者は全体の34.0%に留まった。個人的属性では、「コーチング能力を発揮する機会」が96.0% (n=48)と最も高く、続いて「指導での成功経験と失敗経験」が94.0% (n=47)であった。本結果からコーチング能力を発揮する機会の中で試行錯誤を繰り返すことが一流指導者の役割を獲得するのに必要なキャリア形成過程といえよう。

表9. 移行③：指導者

因子名	項目	経験有		重要度	
		%	(n)	平均値	SD
重要な他者	1. 専門家との出会いがあった	90	(45)	4.91	0.97
	2. 関係者からの誘いがあった	68	(34)	4.94	0.95
	3. 有望選手/一流選手との出会いがあった	90	(45)	5.29	1.04
	4. 同僚との出会いがあった	62	(31)	4.97	0.95
	5. 家族（パートナー）の理解があった	90	(45)	5.58	0.69
	6. メンター-コーチとの出会いがあった	86	(43)	5.51	0.70
	7. 他競技の指導者との交流があった	86	(43)	4.81	1.01
社会化状況	1. 所属先の理解があった	90	(45)	5.47	0.73
	2. 統括競技団体の理解があった	82	(41)	5.15	1.04
	3. 指導活動に対する支援があった	78	(39)	5.18	0.89
	4. 指導者資格取得の機会があった	82	(41)	4.68	1.31
	5. 指導に関する学習の機会があった	92	(46)	5.02	1.13
	6. 海外研修の機会があった	34	(17)	5.41	0.712
個人的属性	1. コーチング能力を発揮する機会があった	96	(48)	5.31	0.85
	2. 指導者資格を取得していた	68	(34)	4.71	1.38
	3. マネジメント能力を発揮する機会があった	74	(37)	5.08	0.95
	4. 専門的知識を習得していた	76	(38)	5.03	1.00
	5. コミュニケーション能力を発揮する機会があった	84	(42)	4.55	2.35
	6. 指導での成功経験と失敗経験があった	94	(47)	5.57	0.72
	7. リーダーシップ能力を発揮する機会があった	82	(41)	5.17	0.95

5. まとめ

本研究では、2016年度笹川スポーツ研究助成採択研究で試案した「一流指導者のキャリア形成過程の仮説モデル」(山田ら, 2017)の有効性を検証することを目的とし、一流指導者のキャリア形成過程を規定する要因とその影響を明らかにし、仮説モデルを検証した。

質問紙調査の結果から一流指導者の発達には、仮説モデルと同様にトップアスリートとして経験を有し、全6ステージで構成されることが実証された。しかしながら、「一流競技者」の発達過程は仮説モデルに比べて長期傾向にあり、「代表指導者」と「国際的指導者」は、経験開始年齢において早期傾向が示された。本結果から各発達過程の年齢区分の修正が求められる。スポーツ的社会化要因について、各移行期での経験有無では全ての項目で経験有が確認されたが、項目によっては経験有が全体の50%にも満たないのが確認された。しかしながら、重要度についてはすべての項目で平均値

は6段階中4.0以上あり本研究対象となった一流指導者においては重要度が高いことが確認された。経験者が少ない項目については、環境整備や機会の充実を図ることが国際競技力向上にとって重要となろう。

本研究では、スポーツ的社会化要因を援用したことから各項目を3因子に分類し、それぞれの経験有およびその重要度を尋ねた。しかしながら、社会化プロセスは、それぞれの要因が相互作用することで役割を学習すると考えられている。本研究で用いた3因子も相互作用することが示唆されるため、今後は更なるデータの蓄積を行い、社会化3因子で説明しきれない新たな因子の探索が必要となろう。また、日本人の一流指導者は限られたサンプルであるため、競技によっては代表指導者が少数であったり、外国人指導者が多くを占めていたり競技間においてサンプル数の偏りがあった。今後も継続したモデルの修正が必要となろう。

【参考文献】

- Carter, A. D., & Bloom, G. A. (2009). Coaching knowledge and success Going beyond athletic experiences. *Journal of Sport Behavior*, 32(4), 419-437
- De Bosscher, V., Shibil, S., Westerbeek, H., & Van Bottenburg, M. (2015). Successful elite sport policies: An international comparison of the Sportspolicy Factors Leading to International Sporting Success (SPLISS 2.0) in 15 nations. Meyer & Meyer Verlag.
- Dawson, A., Dioth, T., & Gastin, P. B. (2016). Career facilitators and obstacles of Australian football development coaches. *International journal of Sports Science & Coaching*, 11(2), 255-269
- Lemyre, F., Trudel, P., & Durand-Bush, N. (2007). How youth-sport coaches learn to coach. *The Sport Psychologist*, 21(2), 191-209.
- Schinke, R. J., Bloom, G. A., & Salmela, J. H. (1995). The career stages of elite Canadian basketball coaches. *Avante*, 1(1), 48-62.
- 山田亜沙妃・工藤康宏・野川春夫・笠原一也 (2017) 一流指導者におけるキャリア形成過程の仮説モデル構築に関する研究. *SSF スポーツ政策研究*, 第6巻1号, 113-121.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。